

---

# Fate/stay night - 赤き弓兵よ再び -

飛妖

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Fate/stay night - 赤き弓兵よ再び -

### 【コード】

N3945N

### 【作者名】

飛妖

### 【あらすじ】

答えを得た英霊エミヤが再び第5次聖杯戦争に召喚される。

## プロローグ

英霊エミヤは答えを得た。

一度は無くした理想を再び得る事ができた。

だから再び誓う。

英霊エミヤシロウは【正義の味方】になると――

体は剣で出来ている

I am the bone of my sword .

血潮は鉄で 心は硝子

Steel is my body ,  
and fire is my blood .

幾たびの戦場を越えて不敗

I have created over a thousand  
blades .

ただの一度も敗走はなくUnknown to Death .

ただの一度も理解されない

Nor known to Life .

彼の者は常に独り

Have withstood pain

剣の丘で勝利に酔う

to create many weapons .

故に生涯に意味はなく

Yet , those hands will never ho

ld anything .

その体はきつと剣で出来ていた

So as I pray ,

” unlimited blade works ”

第一話・赤い弓兵・（前書き）

答えを得ているためかは分からないが士郎とアーチャーの仲は原作ほど悪くない

## 第一話・赤い弓兵・

俺の名前は衛宮 士郎

つい数時間前までは少し特殊ではあったが平凡な学生だったんだ。

だけど学校で全身青タイツみたいな槍を持った男と赤いドレスの甲冑をつけた女の子が戦ってるのを目撃して

青タイツ男に殺された（かもしれない）んだ。

まあ何があったのかは分からないけど生き延びて帰ってきたらまた青タイツが襲ってきて

なんとか手元にあったポスターで対抗してたけど

蹴りを受けて土蔵まで吹っ飛んできちゃった。  
もう駄目かと思っただ瞬間

土蔵の床が光ったかと思うと

・・・赤い外套を着た長身の男が立っていた・・・

「ほう、まさか自分に召喚されるとは夢にも思わなかったな」

男が何か言ってるが小声でよく聞き取れなかった。

「ふむ、まあいいだろう  
サーヴァント【アーチャー】  
召喚に応じ参上した。  
君が私のマスターかね？」

男が言う。

「マス、ター？」

マスターって何だ？

ていうかこの状況が何だ！？

「君が言いたい事は良く分かる  
だがしばし待て外の戯けの相手をして来よう」

そう言い男は土蔵を出て行く

「へえ、お前さんが7体目のサーヴァントかい？  
クラスは何だ？」

槍を持った男が赤い男、アーチャーへ聞く

「さあ？ 何だろうな？」

セイバーかもしれんし、アーチャーかもしれん

はたまたライダーかもしれんし、キャスターと言つ可能性もあるぞ  
？」

「まあ戦えば分かるつてな！！」

そう叫び槍の男は青き閃光のごとくアーチャーへと迫り槍を凄まじい速さで繰り出す。

対するアーチャーはいつの間にか両手に握られていた白と黒の双剣で槍を弾き、捌く

「ハ！！ いいぜいいぜいいぜ！！  
テンション上がって来た！！」

そう言い、槍の男の槍の繰り出す速度が上がって行く

だがそれでもアーチャーは紙一重で槍を捌き続ける

しかし――

ガキン！！

ついに双剣が弾かれ弧を描き飛んで行く。

「間抜け」

男はそう言い

無手となったアーチャーを貫かんと槍を突く

しかし、槍はアーチャーを貫く事はなかった

「何？」

アーチャーの手には弾き飛んだはずの双剣が握られていた。

「どちらが間抜けだろうな？」

そうアーチャーは言い

驚きにより少し動きの止まった男へ双剣を振り下ろす

「チッ！」

男は大きく飛びずさり距離をとる。

「いいぜ？ 名乗りな！

テメエはどこ英霊だ？」

男がアーチャーに向かって言うが

「戯けめ

そう、やすやすと言えるものか」

そしてアーチャーは唇を吊り上げ

「だが、君は分かりやすいな

槍兵には最速の英雄が選ばれると言うが、君はその中でも選りすぐりだ。これほどの槍手は座中にも三人といまい。加えて、獣の如き敏捷さと言えば恐らく一人」

男・ランサー……の持つ朱槍。

アーチャーの肉体がエーテル塊ではなくまだ肉で象られていた頃、  
彼はその武具を紐解いたことがあった。

刺せば必ず対象の心臓を貫いた槍。放てば無限の鏃やじりを撒き散らした  
槍。

銘は、魔槍ゲイボルク。

ゲイボルク扱える英雄はそう多くない。  
というか一人しかない

ゲイボルクを持つ英雄と言えば

ケルト神話の光の御子

【クー・フリーン】

つまり、ランサーの真名は……

「ほう、よく言った。

ならば受けるか、我が必殺の一撃を……」

途端

ランサーからさらに凄まじい殺気が放たれる。

ランサーの槍が紅く発光する。

「待ちたまえ」

準備万端という所でアーチャーがストップをかける

「あん？

今更命乞いか？」

「そんな事はしないさ、いずれは超えなければならんものだからな

私が言いたいのはランサー、全力で来い」

アーチャーの言葉にランサーは目を見開く

「テメエ……」

「いいぜ上等だ！」

そうランサーは言い。

大きく後ろへ飛び

獣のように四肢を地面へつけ、空へと跳躍した。  
ランサーはみるみる上空へと上がって行く。

そして

「受けてみる！」

『突き穿つ（ゲイ）』

ランサーが宝具を発動させる

そしてアーチャーも

「『熾天覆う（ロー）』」

宝具を発動する

「  
『死翔の槍<sup>ボルグ</sup>!!!!!!!!!!!!!!』」

紅い魔槍が放たれる。

それは上空からアーチャーへ向かい凄まじい速度で向かってくる。

「『七つの円環（アイアス）!!!!!!!!!!』」

アーチャーの目前に7つの花弁をもした盾があらわれゲイボルクを防ぐ

だがゲイボルクはそれでは止まらずアイアスを一枚、二枚と打ち破つて行く

四枚目が破られた時、やっとゲイボルクの進行が弱まる

「ぬ、ぐうおおおお!!」

アーチャーがアイアスの残った花弁に魔力を注ぎ強度を上げる。

そして――

「ゲイボルクを、防ぎやがっただと?」

アーチャーはゲイボルクを防ぎきった。

「ふう、なかなか骨が折れたな」

「テメエ、本当にどこの英霊だ？」

ランサーはアーチャー再度訪ねる

「だからそう簡単に言うはずなかるう

ほら、そろそろ別のマスターとサーヴァントが来るぞ  
君はここから離れたらいいのではないかね？」

アーチャーの言葉にランサーは

「チツ、本当だな、しゃあねえ退くか」

そう言い。

ランサーは背を向け飛び出そうとした、が

「ああ、そつだ」

思い出したように振り向き

「テメエの心臓は俺が貰い受ける」

そう言い残し去っていった。

「……ふむ、力を出し惜しみなさすぎたか……？」

アーチャーは失敗だったか？  
などと呑気に言っていた。

「ああ、そうだ  
マスター、君の名前は何だね？」

「え？ あ、『衛宮 士郎』だ  
なあ、これ、一体どういう事なんだ？」

「ふむ、それは後で話すとしよう  
マスター、先ほどのランサーとはまた違うサーヴァントがこちらに  
向かって来ているが……  
どうするかね？」

「え、どうって言われても」

「戦つか、この家に招き入れて茶でも用意するか？」

「出来るなら、後者で」

「了解した。」

第二話・赤い女王・（前書き）

何かやらかした感があるけど、まあいいか！

一話を微修正してたりします！

## 第二話・赤い女王・

side - アーチャー -

ふむ、何の因果か、まさか自分に呼び出されるとはな

以前の私ならばこのまま衛宮士郎を殺していたかもしれんが・・・

私は答えを得た、もはや衛宮士郎を殺す理由はない

しかし、召喚されるならば凜の方が良かったのではあるが

しかし、セイバーの時のように衛宮士郎からの魔力供給が一切ない  
と言う訳ではないようだな

一瞬、嫌な事を思ってしまったが  
微量ながら魔力は流れて来ている

私と衛宮士郎がアインツベルンの森の廃屋で  
をしなければならぬのかと本気で心配した・・・

さて、今まさに屋敷の外にいるマスターとサーヴァントを招き入れるとしよう

凜ではあるだろうが

私が衛宮士郎に召喚されたのであれば、凜のサーヴァントは一体？

セイバーか？

そう思いながら私は塀を飛びこえ二人を迎える

「ハアッ！」

「ぬ．．．！」

予想はしていたがやはり斬られたか．．．

すぐさま干将莫耶を投影し防いだが．．．

ふむ、やはりこの太刀筋はセイ．．．バー？

「セイバー！」

「奏者よ、この者は余にまかせて敵マスターの襲撃に注意しておくがよい」

セイバー・・・ではあるようだが・・・

赤い・・・な・・・

私の記憶にある

美しき騎士王はこんなに赤かったか？

それに自分の事を『余』などと言っていたか？

まさか、こんな序盤から私の全く知らぬ展開になるとは・・・

なんでさ・・・

「さあ、かかってくるがよい、サーヴァントよ  
余が相手だ」

顔の作りが全く同じと言うのも驚きだな

正直イメチェンしたとしか思えぬのだが

「ふう、別に私達は争う気はないのだがね」

やれやれと肩を竦める

「そのような言葉に騙される訳……」

「な、何で遠坂が!？」

ふむ、やっと我が未熟者のマスターが来たか

「衛宮君？」

・  
・  
・  
・  
・  
・  
「で？ どういうつもりかしら？

衛宮君？

敵である私達をお茶に招待するなんて」

「そんな、俺は遠坂と敵対する気はないし、そもそもサーヴァント

とかマスターってどういう事何だ？」

「あなた、何も知らないの？」

「ああ、全く」

ク・・・

凜が見るからに呆れの表情を出しているな

「マスターは魔術師ではあるが殆ど一般人でね  
何も知らないのだ

聖杯戦争の事をマスターに教えてくれると助かる」

「何で私が・・・

アナタ衛宮君のサーヴァントでしょう？

アナタが説明すればいいじゃない」

まあ、そうだろうが

いかんせんそれが出来ぬのだ

「私は今紅茶をいれているのでね」

客人にはより美味しい物を飲ませたいだろう？

「それよ、何でサーヴァントが紅茶いれてるのよ！  
しかも美味しいし！」

「このように美味しい物を余は飲んだ事がない」

「確かに美味しいな・・・」

「気に入って貰えたかね？」

しかし、このセイバーもあの腹ペコ王のように美味しい物に目がないのだろうか・・・？

「もし欲しいならば食事を作るか？」

「そなたのような者に出会えて、余は嬉しい」

「ちよっセイバー！？

何餌付けされてるの！？？」

「ていうかちよつと待て！  
何で家の紅茶の場所とか知ってるんだ！」

ふむ、今はまだ真名は明かせぬからな

どう答えるか・・・

「何、生前、主に仕えていた事もあつたのでね」

「ふーん、まあいいわ

何かもうセイバーがかなり期待してるから良ければ作ってくれるか  
しら」

「承知した。」

エプロンを付け

冷蔵庫の中身を調べる

ふむ、これなら・・・

・  
・  
・  
・  
・  
・  
s i d e - 凜 -

「サーヴァントがエプロン・・・」

全く、主が主なら従者も従者ってことかしら？

「それじゃ、聖杯戦争の説明をするけど、本当に何も知らないのね？」

「ああ、本当に全く知らない」

本当、何でこんなヘツポコが召喚なんて出来たのかしら

「はあ、まあいいわ

いい？ 聖杯戦争って言うのは・・・」

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「殺しあい・・・

本当なのか？」

「ええ、本当よ  
本来私達も殺し合う敵どうしよ？  
今のこの状況が可笑しいのよ」

主にあんた達がね

「だから俺は遠坂と敵対する気はないって」

「まだそんな事言ってるのアナタ？  
そんな考えじゃ真っ先に死ぬわよ？」

本当に甘すぎるわ

あのサーヴァントもよ  
一体なに考えてるのかしら？

## 登場人物

### 【アーチャー】

この作品の主人公

答えを得ており妙に清々しい気分で聖杯戦争に参加している。

属性：中立・中庸

筋力：D 魔力：B

耐久：C 幸運：E

敏捷：C 宝具：???

### 【スキル】

#### 【対魔力：D】

シングルアクション  
一工程による魔術行使を無効化する。

魔力避けけのアミュレット程度の対魔力。

#### 【単独行動：B】

マスターから魔力供給を断つてもしばらくは自立できる能力。  
ランクBならば、マスターを失っても二日間現界可能

#### 【千里眼：C】

視力の良さ。

遠方の標的の捕捉、動体視力の向上。

【魔術：C】

オーソドックスな魔術を習得。  
得意な力テゴリーは不明。

【心眼（真）：B】

修行。

鍛錬によって培った洞察力。

窮地において、その場で残された活路を導き出す戦闘倫理。

【宝具】

無限の剣製

アンリミテッドブレイドワークス

【衛宮 士郎】

アーチャーのマスター

この小説では準主人公位置？

【セイバー】

アルトリアと酷似している少女

赤い、そしてスケスケ

凜はマスターだが同じ赤色が原因なのかライバル意識が微妙にある

アーチャーの赤色は気にしない

と言つか気に入っている

【真名】

???

筋力：B 魔力：A

耐久：C 幸運：B

敏捷：C 宝具：???

【技能】

【対魔力：C】

セイバーのクラスにしては有り得ないほど低いが、どうやらセイバー自身に原因があるらしい。

【皇帝特権：EX】

自分が持っていないスキルもセイバーが「余は持つておる！」と主張すると短期間獲得できる。

A以上だと神性やカリスマ等、肉体に寄与しない能力すら獲得できる。

【頭痛持ち：B】

生まれつきの呪い。

持つていてマイナスなスキル。

その由来は、母から与えられていた毒物。

【宝具】

???

【遠坂 凜】

セイバーのマスター

アーチャーにいと也容易く餌付けされたセイバーに対して本当に大丈夫なの？と心配している。

### 第三話・アインツベルン・（前書き）

今までにやったことのない試みをやったら

またやらかした感があるわ・・・

良ければ最後の選択肢にご協力ください

### 第三話・アインツベルン・

side - アーチャー -

私達は今、教会へと向かっている。

セイバーが私の知るセイバーと全く違つと言つ事から

まだ何か私の知らぬ

出来事がおこるかもしれん

あまり気は抜けないな

だがこのまま教会へ行きその帰り道にイリヤスフィールとバーサーカーに出会つはず

凜のセイバーのようにバーサーカーが別の者になっている可能性もあるかも知れんが

やれやれ・・・

表には出さんがセイバーが全く知らぬ英雄と言つのが私には衝撃だったらしい

色々と考えてしまっな

ああ、ちなみにセイバーに出した食事は中々好評だったよ。

喜んでもらえるのは作る側としても嬉しいものだ。

・  
・  
・  
・  
・  
・

新都のビル群が並ぶオフィス街を越えた郊外に言峰教会があった。

「ふむ、私はここで待っていよう」

わざわざ言峰の顔を見る必要もあるまい

……いや、今ここで仕掛けるか？

やめておくか

この教会にはギルガメッシュがいる

下手をすればランサーとも戦わねばならぬかもしれないからな

「奏者よ、余もここに残る

この教会に入るのは嫌だ」

ふむ、セイバーも無意識にこの教会は怪しいと思っているのかもし  
れん

まあ、ただ嫌なだけかもしれないが

「分かったわ

いい？ 大人しくしてるのよ？」

「奏者よ、余は子供ではない。

そのくらい分かっておる」

そう、膨れながらセイバーは言う

「ク……」

「む……何故笑うのだアーチャー？」

「いや、すまない  
何でもないさ」

「それじゃ、衛宮君、行くわよ」

「ああ」

二人は教会の中へ入って行った

「アーチャー」

セイバーが私に話しかけてくる

「む？ なんだね？」

「そなたはどのような思いでこの聖杯戦争に参戦したのだ？」

「参戦云々は召喚者の運によるものだが・・・  
そうだな、救えなかったモノを救うため・・・と言うことにしてお  
いてくれ」

「救えなかったモノを救うため・・・か」

「まあ、愚かな理想かもしれんがね」

「何を言う、立派ではないか」

私が立派か・・・

・ ・ ・ ・ ・

数分後に二人が出てきた。

そして今は帰路についている。

「それじゃ、ここで別れましょ」

と凜が切り出す。

「次あった時は敵同士よ」

凜はそう言うが

「俺は遠坂とは戦いたくない」

我がマスターはそうは思わないらしい

「まだ、そんなこと言ってるの？」

あなた本当にあまいわね」

ハア、とため息をつき

「それじゃあね」

と言い歩き出そうとするが

「セイバー、武器を構えろ  
サーヴァントだ。」

私は洋弓を投影し構える。

「あら？ 気づいていたのね」

坂の上からの声に皆が目を向ける。

「な、何・・・あれ」

そこには小さな少女と - - -

1 ・小山のような巨人がいた。

2 ・思い出の騎士王がいた。

3 ・屈強な武人の姿をしたサーヴァントがいた。

#### 第四話・バーサーカー - (前書き)

天の鎖ってエルキドウとエンキドウ

どっちでも正しいのかね？

## 第四話・バーサーカー -

side - アーチャー -

小山のような巨人がいた - - -

「こんばんは、お兄ちゃん  
会つのはコレで二度目だね」

スカートの端を軽く持ち上げてお辞儀をする。

「二度目・・・？」

「あの時の・・・」

衛宮士郎は少し考え、思い出したように言う。

「嘘、あれ、バーサーカー？」

イリヤスフィールは驚愕している凛へと視線を向ける

「初めまして、リン  
イリヤスフィール・フォン・アインツベルンって言えばわかるかしら？」

「アインツベルン！ まさかこれほどのサーヴァントを召還するなんて……」

凜は驚きの声をあげる。

「さて、凜、ここは一時共闘とイカないかね？

戦わずともあのサーヴァントがどれほどのモノか分かるだろう？」

「そうね、でも、あの子はあなたのマスターを狙ってるみたいだけど？」

「ふむ、確かにそうだが、君のサーヴァントは今ここで退くという選択肢が端からないみたいだが？」

セイバーはもう戦闘準備は完了している

実にやる気満々だな・・・

「ちなみにセイバー

あのバーサーカーの正体はヘラクレスだ。」

「なっ!？」

ヘラクレスですって!？」

凜が驚愕する。

ギリシャの大英雄ヘラクレス

そんな者がバーサーカーなどになっていれば驚くだろう。

「あの大英雄ヘラクレスと相見える事ができるとは……!」

セイバーの目がキラキラしているな・・・

「へえ、よく知ってるね

その通り、私のバーサーカーはギリシャの大英雄ヘラクレスよでも何で分かったのかしら？」

「ク、私がそれを言うと思うかね？」

「ふふ、そうよね

ま、別にいつか

どうせここで皆、死ぬんだもの  
それじゃあ」

・・・殺っちゃえ、バーサーカー・・・

「!!!!!!!!!!!!!!」

イリヤスフィールの言葉に巨人は咆哮し此方へ向かってくる。

「さて、凜よ、どうするかね？」

矢を放ちながら凜へ問う。

「分かったわよ

衛宮君！ 今から共闘するから！ それでいいわよね！」

「あ？ ああ！

何かよく分からないが分かった！」

我がマスターはいきなりの事に混乱しているようだな。

まあいい

「セイバー、バーサーカーを頼むぞ  
私は援護する」

「承知！」

この場を離れ、狙撃が十分に出来る場所へ行き

バーサーカーへ矢を放つ。

分かってはいたが全て弾かれてしまうな。

・  
・  
・  
・

・ ・ ・

「……………!!!」

バーサーカーが巨大な斧剣を振り上げセイバーへ向かい振り下ろす。

「くっ」

セイバーはそれを剣でずらし、交わす

そして隙あらばバーサーカーの体へ斬りつけるが全く刃が通らない。

「セイバー！」

凜はバーサーカーへ

ガンドを連射しセイバーを援護するがやはりこれも全く効かない。

「あはは！

無駄よリン、バーサーカーはBランク以下の攻撃を無効化するんだから」

「くう、何て出鱈目なの!？」

凜がどうにかならないかと考え始めたその時

「 I a m t h e b o n e o f m y s w o r d .

そんな言葉が聞こえてきた。

「【偽・天の鎖よ（エルキドゥ）】！！！」

その言葉と同時に鎖がバーサーカーへ飛来し絡みつく

「バーサーカー！」

「！！！！！！！」

バーサーカーが鎖を引きちぎろうとするが逆に鎖が絡まっていく。

『マスター、セイバーを退かせろ  
宝具を使う』

士郎へ念話を送り

一本の捻れた剣を取り出し弓へ添える。

「と、遠坂！」

アーチャーが宝具を使うからセイバーを退かせろって！」

「分かったわ！」

セイバー！」

そして再び

「 I a m t h e b o n e o f m y s w o r d .  
」

詠唱が聞こえ

【偽・螺旋剣（カラドボルグ2）】

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

天の鎖だがギルガメッシュの物に比べたらかなり劣化しているからな

いつ引きちぎられるかわからん

決める。

「 I a m t h e b o n e o f m y s w o r d .  
」

狙いをバーサーカーの心臓へ向け

【偽・螺旋剣（カラドボルグ？）】

放つ！

カラドボルグは天の鎖を引きちぎろうともがくバーサーカーの胸を  
抉り

【壊れた幻想】  
フロークンファンタズム

爆発した - - -

・  
・  
・  
・

・ ・ ・

「やった、のか？」

よく見えなかったがバーサーカーの胸を抉ったのは刀身が捻れていたが間違いなく剣だった。

そしてそれが大爆発をおこしたんだ  
まずは無事な筈がない。

「宝具を使い捨てるなんて・・・」  
遠坂が信じられないと言う表情で驚いている。

だがそれはさらなる驚愕により塗りつぶされる。

「  
!!!!!!!!!!!!!!」

死んだと思ったバーサーカーが再び動き出したのだ。

「ふうん、凄いね、バーサーカーを一回殺すなんて」

少女が感嘆の声を漏らす

「一回？ どういう事？」

遠坂が訝しいげに少女に訪ねる。

「バーサーカーの宝具“十二の試練”の力よ  
だからバーサーカーはあと十一回殺さなきゃ死なないの」

「どんだけ出鱈目なのよ……！！」

遠坂が悔しそうに拳を握る。

「バーサーカー、戻って」

少女はバーサーカーを霊体にする。

「何を……」

遠坂が少女に問う

「ここでお兄ちゃんを殺すつもりだったけど  
いいわもう少し生かしておいてあげる」

そう言い少女は歩き出す。

「それじゃあバイバイ、また遊ぼうねお兄ちゃん」

そして夜の闇に消えて行った。

## 第五話・同盟・

さて、あれから家へと戻ってきたわけだが・・・

「さ、説明してもらいましょうか？」

凜からさつさと吐きなさいよ、というオーラが出ている。

何故このような事に、やはり壊れた幻想はまずかったのか？  
いや、前回はバーサーカーに使った筈だが

バーサーカーの真名を知っていた事か？

「何の事だね？」

「何のって、あんたがバーサーカーの真名を知っていた事と宝具を  
使い捨てた事よ！」

両方だったか・・・

「ク、敵である君達に言うと思うかね？」

私がそう言うと凜はキョトンとした顔になった。

なんでぞ。

「何言ってるの？」

「共闘してるんだから敵じゃないでしょ？」

などと言い放った。

「共闘は先の一回限りだったはずだが……」

「あんな出鱈目な化け物を倒すにはこのまま共闘してた方がいいじゃない」

「む？ 同盟を組むと言う事か？」

「その通りよ。」

別にいいわよね？ 衛宮君？」

「ああ、俺はそれで構わない。」

やはり同盟を組む事になったか  
まあその方がいい、私としても凜やセイバーと戦いたくはないしな。

「ふむ、それならば仕方ない  
先ほどの質問に答えよう。」

「まず何故バーサーカーの真名を知っていたかだが・・・  
私自信が奴と会ったことがあるからだ。」

「それじゃ、あんたもギリシャの英雄なの？」

「それは秘密だ。」

ピキッ！

む、青筋が・・・

「そして二つ目の宝具の使い捨てに關してだが・・・  
それは私が宝具を数多く所持しているからだ。」

「数多くって、どれくらいよ？」

「それはもう、沢山だ。」

ピキピキッ！

む、青筋+拳か・・・

「落ち着くがよい、奏者よ。」

アーチャーのマスターが引いておる。」

「ああ・・・」

これが素の遠坂なんだな・・・」

何か悟った目で凜を見つめている。

「はあ、ヘラクレスと顔見知りで宝具を多数所持している英雄つて・・・」

あんた誰よ？」

「いくら同盟を結んでいるといっても真名は教えられんな。」

「そんな事分かってるわよ

はあ、もういいわ

今日は取りあえず帰るから。」

そう言い、凜は立ち上がり玄関へと歩き出す。

「遠坂、夜道大丈夫か？」

「衛宮君、あなたねえ

こつちにはサーヴァントだっているんだから大丈夫に決まってるじゃない。」

「そつだよな、じゃあ、気をつけて帰れよ。」

「ええ、それじゃあね、衛宮君

また明日来るわ。」

そう言うと凜は遠坂邸へ帰っていった。

「ん？ また明日来る？ どういう事だ？」

「さて 私は知らんよ。」

さて、この後、どうするかだな・・・

朝になれば確実に虎と桜がやってくるだろう。  
どう言い訳するかだな・・・

いや、私は霊体化すれば済む話ではあるが先ほどの凜の口振りから  
すれば明日の朝、荷物を持ってここへやってくるだろう。

ふむ、何と言いつけるものか・・・

む？ 何故、私がこのような事を考えているのだ？



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3945n/>

---

Fate/stay night - 赤き弓兵よ再び -

2010年10月8日12時12分発行